

動物たちの町

札幌市立稲陵中学校 2年 濱木 星来

あるところに動物たちの町があった。その町は周囲が山で囲われており、町の中心には大きな川が流れていてとても自然豊かな町である。だがその町は大きな問題を抱えていた。

それは、大雨が降った際に川が氾濫したりがけ崩れが発生したりといった災害に見舞われることだ。これには動物たちも困って、どうしたらいいか悩んでいた。

そんな時、一匹のサルが言った。

「みんなで税金を出し合って、この川に堤防を作るべきだ。」

他の動物たちも賛成し、無事に堤防は完成した。さらに動物たちは税金を出し合い、がけ崩れを防ぐための工事も行った。

動物たちは学んだのである。一人でどうにもできないことも、みんなで協力すればよいのだと。

それから動物たちは税金を出し合うことに決めた。集めた税金で生きやすい環境を作ろうと決めたのだ。

まず手始めに動物たちは医療を充実させた。さらに学校や教育についての援助や、高齢者への支援のために税金を使ったり、他にも様々なことに税金を使った。

そうしてこの町は住みやすい町へと変わっていったのだった。――

――この話には、たくさんの税金の使い方が出てくる。

例えば、堤防を作るなど災害を防ぐために使った税金は「公共事業関係費」という。他にも町の整備や住宅支援などの使い道もある。

「社会保障関係費」と言って、医療や介護に使われる税金。学校教育や科学技術の発展のために使われる税金など、他にもたくさんの使い道がある。私たちは、たくさんの税金のおかげで生きているのだが……

おっと、どうやら先ほどの話にはまだ続きがあったようだ。町はずれの丘で二匹の動物が何やら話しているみたいだ。

「――ということがあってな。この町は豊かになったんじゃないよ。」

と、フクロウはリスの子に言った。

「そうなの？すごいね。」

「……ところでリスの子よ。昔はこの地に何が住んでおったかしっとるか？」

リスの子は首をかしげた。

「それはな、人じゃ。ここはもともと人がたくさん住んでいた。ところがどんどん増えていく税に不満を持った人々が国外に脱出したり争いを起こしたりしてな。やがて国は滅びてしまったのじゃ。わしはこの町も同じ道をたどってしまわないか心配じゃのう。」

丘の上にはただ優しい風が吹くばかりであった。――

――今、日本にはたくさんの税金がある。だがこのまま税が増えていくと国は衰亡していくだろう。私たちは、今一度税の在り方について考えるべきなのだ。